

SPECIAL EXHIBITION
TŌFUKU-JI
MONUMENTAL ZEN TEMPLE OF KYOTO

特別展

東福寺

プレスリリース
PRESS RELEASE



開催趣旨

新緑や紅葉の名所として知られる東福寺は、京都を代表する禅寺の一つです。日本から中国へと渡り、南宋時代の高僧無準師範に禅を学んだ円爾(聖一国師)を開山に迎えて創建されました。「東福寺」の名は、奈良の東大寺と興福寺になぞらえて、その一字ずつをとったことに由来します。

東福寺の寺宝をまとめて紹介する初の機会となる本展では、「画聖」とも崇められた絵仏師・明兆による記念碑的大作「五百羅漢図」全幅を修理後初公開するとともに、応仁の乱による戦火を免れた貴重な文化財の数々や、巨大伽藍にふさわしい特大サイズの仏像や書画類の優品も一堂に展観いたします(※会期中展示替えがあります)。草創以来の東福寺の歴史を辿りつつ、大陸との交流を通して花開いた禅宗文化の全容を幅広く紹介し、東福寺の日本文化における意義とその魅力を余すところなくご覧いただきます。

初めて全貌が明かされる、明兆畢生の大作



【表紙の作品】

重要文化財 五百羅漢図のうち 吉山明兆筆 南北朝時代・至徳3年(1386) 京都・東福寺蔵

(中) 第1号幅 東京会場: 3月7日(火)～3月27日(月) 京都会場: 10月7日(土)～10月22日(日)

(右) 第20号幅 東京会場: 3月28日(火)～4月16日(日) 京都会場: 10月24日(火)～11月5日(日)

(左) 第40号幅 東京会場: 4月18日(火)～5月7日(日) 京都会場: 11月21日(火)～12月3日(日)

水墨と極彩色とが見事に調和した、若き明兆の代表作。1幅に10人の羅漢を表わし50幅本として描かれた作で、東福寺に45幅、東京・根津美術館に2幅が現存する。東福寺の伽藍再興運動のなか、至徳3年(1386)に完成したことが記録により判明する基準作としてもきわめて貴重である。14年に渡る修理事業後、本展で初めて全幅が公開される。



東福寺 三門



東福寺

東福寺は鎌倉時代前期に摂政・関白を務めた九条道家が、奈良の東大寺と興福寺とを合わせたような大寺院の創建を発願し、開山として円爾（聖一國師）を招いて建立した禅宗寺院です。後世「伽藍面」と称されるほど我が国随一の巨大伽藍を誇り、多くの弟子を育成しました。南北朝時代には京都五山の第四に列し、本山東福寺とその塔頭には中国伝来の文物をはじめ、建造物や彫刻・絵画・書跡など禅宗文化を物語る多くの特色ある文化財が伝えられています。国指定を受けている文化財の数は、本山東福寺・塔頭合わせて国宝7件、重要文化財98件、合計105件におよびます。そのうち東福寺所属の絵仏師・吉山明兆は大部の禅宗画を数多く描き、代表作に近年大修理の完成した重要文化財「五百羅漢図」があります。

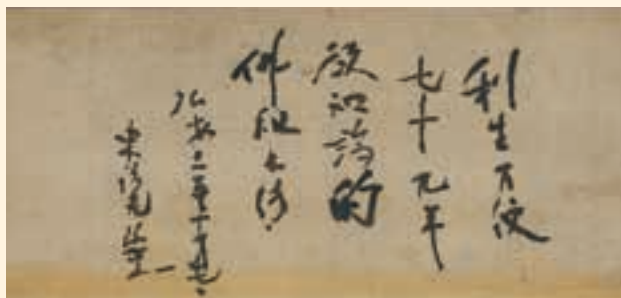


東福寺 境内図

「第1章」東福寺の創建と円爾えんに

嘉禎元年（一二三五）、円爾（一二〇二～八〇）は海を渡り、南宋禅宗界の重鎮である無準師範（一一七七～一二四九）に師事します。帰国後は博多に承天寺を建立。その後九条道家の知遇を得て京都に巨利、東福寺を開きました。以来、寺は災厄に耐えて古文書や書跡、典籍、肖像画など無準や円爾ゆかりの数多の宝物を守り継いできました。それらは十三世紀の東アジアの禅宗と日中交流の実情を窺わせる、質量ともに類をみない文物群で、今日、東福寺を中世禅宗文化最大の殿堂たらしめています。

円爾の生き様を伝える臨終最期の筆致



重要文化財 遺偈 円爾筆
鎌倉時代・弘安3年（1280） 京都・東福寺蔵
東京会場：4月4日（火）～5月7日（日）
京都会場：11月7日（火）～12月3日（日）

円爾が臨終に書き遺した四言四句よりなる詩。衆生の利益を念じて精進した79年、禅の真理は仏も祖師も伝えず自ら体得するものと、仏道に捧げた生涯を顧みる。渾身の氣力を注いだこの筆跡は、日本に残る最古級の遺偈としても貴重である。

これぞ南宋肖像画の極致



国宝 無準師範像 自賛
中国 南宋時代・嘉熙2年（1238） 京都・東福寺蔵
東京会場：3月7日（火）～4月2日（日）
京都会場：10月7日（土）～11月5日（日）

南宋禅宗界きっての高僧で、円爾の参禅の師である無準師範の肖像。無準が自ら賛を書いて円爾へと付与した作で、中国から日本へと禅の法脈が受け継がれたことを象徴する。迫真的な面貌表現は南宋肖像画の高い水準を示す。

「第2章」聖一派しょういちの形成と展開

円爾の法を伝える後継者たちを聖一派と呼びます。円爾は禅のみならず天台密教にも精通し、初期の聖一派の僧たちも密教をよく学んでいました。また彼らはしばしば中国に渡り、大陸の禅風や膨大な知識、文物を持ち帰りました。東福寺周辺には彼らの書や、面影を伝える肖像画や彫刻、袈裟などの所用品が多数現存し、いずれも禅宗美術の優品ぞろいです。聖一派は国際性豊かで好学の氣風が強く、名僧を多く輩出し、禅宗界で重きをなしました。

円爾の直弟子、中世随一の強面肖像画こわもて



重要文化財 癡兀大慧像
鎌倉時代・正安3年（1301） 京都・願成寺蔵
東京会場：3月7日（火）～4月2日（日）
京都会場：10月7日（土）～11月5日（日）

癡兀大慧（1229～1312）は、もと天台僧。円爾に法論を挑んだが、その徳に圧倒されて弟子となった。本像は73歳の折の肖像画で、目も見開きにらむ顔が迫力満点である。中世の肖像表現の白眉であり、畏怖にみちた禅風をしのばせる。

展覧会初出品

まるで禅問答のような書の怪作



虎一大字 虎関師鍊筆
鎌倉～南北朝時代・14世紀 京都・霊源院蔵
※東京・京都会場とも通期展示

円爾の孫弟子で、東福寺第15代住職・虎関師鍊（1278～1346）の書と伝える。漢詩文や書にも優れた当代きっての学僧が、これは何かと問いかけているようだ。文字か絵か、座した虎か怪物か、はたまた座禅する虎関自身の肖像か。

「第3章」伝説の絵仏師・明兆

吉山明兆（一三五二～一四三二）は、東福寺を拠点に活躍した絵仏師です。江戸時代までは雪舟とも並び称されるほどに高名な画人でした。寺内で仏殿の荘厳などを行う殿司職を務めたことから、「兆殿司」とも通称されます。中国将来の仏画作品に学びながらも、冴えわたる水墨の技と鮮やかな極彩色とにより平明な画風を築き上げ、巨大な伽藍にふさわしい巨幅や連幅を数多く手掛けました。本章では、東福寺および塔頭に伝蔵される明兆の代表作をご覧ください。

規格外のスケールを誇る超巨大な観音図



326.1
cm

重要文化財 白衣観音図 吉山明兆筆 室町時代・15世紀 京都・東福寺蔵

東京会場：4月11日（火）～5月7日（日） 京都会場：10月7日（土）～11月5日（日）

明兆は巨幅や連幅を数多く描いたが、そのなかでも本作の巨大さは圧倒的である。もとは法堂の壁面に貼られていたとも考えられる作で、筆勢あふれるダイナミックな描写には明兆の非凡な画力が遺憾なく発揮されている。

画業円熟期の傑作、東福寺の大達磨



重要文化財 達磨・蝦蟇鉄拐図 吉山明兆筆 室町時代・15世紀 京都・東福寺蔵

東京会場：3月7日（火）～4月9日（日） 京都会場：11月7日（火）～12月3日（日）

明兆画を代表する優品。中央の達磨はシンメトリックな構成美と緻密な陰影描写、江戸絵画を先取りしたような明るく伸びやかな筆さばきが印象深い。ユーモラスな左右の蝦蟇・鉄拐図は中国絵画の名品を模写したものである。

第4章 禅宗文化と海外交流

中国で禅を学んだ円爾は、帰朝に際して数多くの仏教文物を将来しました。円爾と中国仏教界との交友は帰国後も継続し、さらにそうした対外交流のネットワークは、円爾の弟子に連なる聖一派の禅僧たちにも受け継がれていきます。彼らは外交や貿易にも積極的に携わり、その後の禅宗文化の基軸となるさまざまな文物が東福寺に集積されていきました。海外交流の一大拠点として発展した東福寺は、日本の文化史上においても重要な役割を果たしたのです。



国宝 太平御覽 李昉等編

中国 南宋時代・12～13世紀 京都・東福寺蔵

※東京・京都会場とも通期展示（ただし、冊替えあり）

円爾がもたらした宋王朝勅纂の百科事典

北宋2代皇帝太宗の勅命で、李昉ら文臣が編纂した1000巻よりなる類書（百科事典）。この南宋版は、円爾が宋から将来したと伝わる。宋王朝の知を結集した本作のように、円爾は禅宗に付随してさまざまな中国文化をもたらした。

第5章 巨大伽藍と仏教彫刻

東大寺と興福寺の名に由来する東福寺の壮大な規模は、京都東山にそびえる巨大伽藍と尊像等の仏教彫刻に象徴されます。創建当初は宋風の七堂伽藍に、仏殿本尊の釈迦如来坐像をはじめとした巨大群像が安置され、「新大仏寺」とも称されました。その後、度重なる災禍に遭いながらも復興を遂げてきた東福寺には、歴代の再建あるいは塔頭伝来にかかる禅宗建築や彫刻、また関連する書画が現存し、「伽藍面」と称されてきた壮観を今に留めます。



国宝 禅院額字并牌字のうち方丈 張即之筆

中国 南宋時代・13世紀 京都・東福寺蔵

東京会場：3月7日（火）～4月9日（日）

京都会場：10月7日（土）～10月22日（日）

伽藍を飾る、無準師範が円爾に贈った開堂祝いの書

円爾が博多の承天寺を開堂した際に、無準師範が贈った一群の額字・牌字。堂舎に掛ける扁額や牌（行事等の告知板）の、手本用の書である。無準と南宋の能書の張即之が筆者とされ、各地の禅院にこの雄渾の書風が広まった。



展覧会初出品

エキセントリックな 風貌の羅漢たち

十六羅漢は、釈迦の命を受けて永くこの世に留まり、仏の教えを守り伝える役目を負った16人の仏弟子のこと。奇怪でありながらもコミカルな表情の羅漢たちは、まるで漫画のようだ。洗練された美しい描線にも注目したい。

じゅうろくろく かん ず
十六羅漢図

中国 明時代・15～16世紀 京都・永明院蔵

東京会場：3月7日（火）～4月9日（日）

京都会場：11月7日（火）～12月3日（日）



重要文化財 東福寺伽藍図 了庵桂悟賛 室町時代・永正2年(1505) 京都・東福寺蔵

東京会場：4月11日(火)～5月7日(日)
京都会場：11月7日(火)～12月3日(日)

中世人が行き交う大伽藍

東福寺の全景を詳細に描く最古の絵画遺品。伽藍の方位や配置を伝える絵図として作られたものだが、通天橋や紅葉を含む山内の景勝が一流の水墨画人の手で表されており、中世の実景山水図の代表作ともみなされている。



217.5
cm

仏手 鎌倉～南北朝時代・14世紀
※東京・京都会場とも通期展示
京都・東福寺蔵

展覧会初出品

2メートルもある、もど本尊の巨大な左手

この手は明治14年(1881)に焼失した、東福寺旧本尊の巨大さをしのべる数少ない遺例。九条道家によって創建された当初の本尊は、建長7年(1255)までに完成したが約70年後に焼失。この仏手はその後に再興された像の左手。



修理後初公開

運慶作? この力強い まなざしを見よ

法堂本尊の釈迦如来を守護する四天王のうち、北方をまもる多聞天像。この四天王は現本尊とともに、三聖寺から移されたもの。他の3像は鎌倉時代後半頃の作だが、本像のみ鎌倉時代前半のもので、きわめて運慶風が強い。

四天王立像のうち多聞天立像
鎌倉時代・13世紀 京都・東福寺蔵
※東京・京都会場とも通期展示

東京会場

会 期 2023年3月7日(火)～5月7日(日)
会 場 東京国立博物館 平成館
主 催 東京国立博物館、大本山東福寺、
読売新聞社、NHK、
NHK プロモーション、文化庁
お問合せ 050-5541-8600 (ハローダイヤル)



本展(東京会場)の収益の一部は、
「紡ぐプロジェクト」における文化財の修理事業に充てられます。

京都会場

会 期 2023年10月7日(土)～12月3日(日)
会 場 京都国立博物館 平成知新館
主 催 京都国立博物館、大本山東福寺、
読売新聞社、NHK 京都放送局、
NHK エンタープライズ近畿
お問合せ 075-525-2473 (テレホンサービス)

展覧会公式サイト: <https://tofukuji2023.jp/> 展覧会公式Twitter: @tofukuji2023

報道関係 特別展「東福寺」広報事務局(OHANA内) 〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-6 りそな九段ビル5F
お問合せ TEL: 03-6869-7881 FAX: 03-6869-7801 e-mail: tofukuji2023@ohanapr.co.jp

※入館方法、開館時間、休館日、観覧料等の情報は、確定し次第、展覧会公式サイト等でお知らせします。

※会期中一部作品の展示替えを行います。詳細は展覧会公式サイトでお知らせします。

阿難

迦葉

重要文化財
鎌倉時代13世紀 迦葉・阿難立像
※東京・京都会場とも通期展示